

Bulletin

212

2008年12月号

COLONNADE

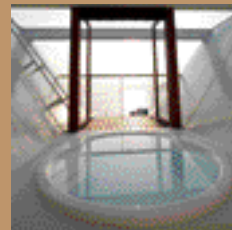
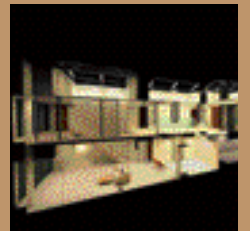
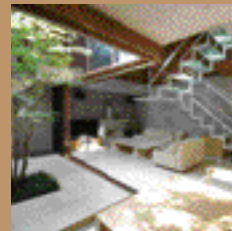
- 阪神・淡路大震災からの住宅復興と批判をめぐって
 こうべまちづくりセンター・まちづくり学校長/神戸大学名誉教授 安田 丑作 氏 2
- 岩手・宮城内陸地震
 JIA東北支部/大蔵建築設計事務所 大友 彰 4
- 災害につよいまちづくり
 富士常葉大学大学院環境防災研究科 重川 希志依 氏 6

FORUM

- 梅沢良三さんに「構造家の発想」を聞く ————— Bulletin編集委員 8
- 夢中になった科学万博「迎賓館」の設計 ————— 第一工房 高橋 誠一 10
- ネットワークづくりと発信を
 レジオン・コンサパティブ 一級建築士事務所 三上 紀子 11
- 支えられて10年 ————— MARIO DEL MARE一級建築士事務所 下平 万里夫 11
- 提案型都市建築を訪れる ————— NTT都市開発 吉田 信一郎 12
- 多彩だったこの一年 トリノを巡る旅とJIA東北大会 ——— ヒガノ 立石 博巳 13
- 文化財の宝庫・上野界限を歩く ————— 筑波設計 上遠野 公一 14
- 横須賀の近代化遺産へ ————— 倉澤智建築事務所 倉澤 智 15
- UIA大会：トリノから東京へ ————— 構想建築設計研究所 上浪 寛 16
- シンポジウムと見学会「半世紀を迎えた世田谷区民会館+
 区役所庁舎」に参加して ————— 共同建築設計事務所 田邊 峰雄 18
- 10年、1000件を迎えたJIA埼玉建築相談室 — 中里建築設計工房 中里 昇 19
- 小さな秩序のつながり ——— 東北大学大学院建築空間学研究室 田原 香織 氏 20
- 士法改正の対応準備はできていますか? ——— 日本設計企画本部 近藤 剛啓 21

BACKYARD

- 選挙公報 ————— 22
- 声：先人に学ぶ素直で自然体な物創り ——— 環境プランニング 木下 光 25
- 支部ダイジェスト 9/10月 ————— 26
- こんな本を読みました『フラクタル造形』
 杉本由美子建築設計事務所 杉本 由美子 26
- 編集後記 ————— 27



阪神・淡路大震災からの 住宅復興と批判をめぐって



こうべまちづくり
センター・
まちづくり学校長
神戸大学名誉教授
安田 丑作氏

はじめに

あの阪神・淡路大震災から、まもなく14年を迎えようとしている。

平成7(1995)年1月17日午前5時46分に発生した淡路島北部を震源地とするマグニチュード7.3の大地震は、神戸、阪神間の中心市街地を襲った大都市直下型であったため、甚大な人的被害と家屋の倒壊・焼失、都市基盤の損壊、商業・業務機能の停滞といったさまざまな被害をもたらした。兵庫県下だけでも、この地震による死者は6,400人を超え、住家被害(全・半壊)約53万9千棟、焼損棟数約7.5千棟、被害総額9兆9千億円(推定)で、被害規模において、わが国の地震災害史上、関東大震災以来のものとなった。

その後も、鳥取県西部地震(2000年)、芸予地震(2001年)、三陸沖、宮城県北部、十勝沖地震(2003年)、新潟県中越地震(2004年)、福岡県西方沖地震(2005年)、能登半島地震(2007年)、新潟県中越沖地震(2007年)とつづき、今年になってからでも、岩手・宮城内陸地震(6月14日)が発生しており、まさに「地震列島」である。また海外でも、中国で5月12日に起きた四川大地震は記憶に新しい。

これらの地震とその後の復旧・復興については、ジャーナリズムやアカデミズムをはじめとして、さまざまに取り上げられてきた。阪神・淡路大震災の復旧・復興をめぐっても、これまでも数多くの論評がなされ、その対応策への批判も少なくない。本稿では、こうした批判のうち住宅復興にかかわる二、三の論点についてあらためて考えてみたい。

阪神・淡路の住宅復興とその批判

震災後の復旧から復興段階にかけての生活再建の最大の課題は、住宅を失った人々への応急仮設住宅につづく恒久住宅の確保である。阪神・淡路大震災における兵庫県全体での住宅復興計画では、全体で約12万5千戸の住宅供給が必要とされ、そのうち約6割の8万戸を災害復興公営住宅など公的賃貸住宅として供給、同時に家賃低減策を講じることとなった。

このような大量の公的住宅を中心とした直接供給方式に対して、それまでの居住形態や多様な住宅ニーズを考慮しない避難所 応急仮設 災害公営といった「単線方式」とする批判が起こり、その後の鳥取西部地震の場合などで採用された住宅再建支援金支給方式との対比もされたりした。しかし、被災地の災害特性や地域・住宅事情のちがいを考慮するとき、あの緊急時における政策判断に対してそうした批判がはたして妥当であろうか。

阪神・淡路の地震災害は、インナーシティ災害とも言われるように老朽木造密集市街地に集中していたため、災害の規模(被災住宅数など)が桁違いに大きい上に、被災住宅は木造長屋や木造賃貸アパートの比率が高かった。しかも、当初予想された以上に、その居住者の多くは高齢者で借家居住の住宅確保困難層(低所得者層)であることも判明した。

こうした状況のもとで、被災自治体が一刻も早くそうした人々に対する住宅の量的確保を急ぎ優先させたことは、現行制度の枠なかでの震災復興の福祉施策としての選択はむしろ評価されるべきであろう。それと同時に、こうした公的住宅の大量供給を可能にするために、用地確保と予算措置に多大な努力が払われたことも指摘しておきたい。また、新規の災害公営住宅のほとんどは郊外の遠隔地に立地したとの報も一部で見られるが、神戸市では全体供給量の約6割は被災者の希望の多いと推定される被災地周辺の既成市街地に建設された。

こうした努力にもかかわらず、高齢者にとって居住形態の大きな変化や地域社会(コミュニティ)とのつながりが希薄になったことによる新しい環境への適応力に与えた影響は大きく、課題を残したことも事実である。入居希望者が多く高齢者優先と機会均等などの観点から入居の決定を抽選方式にせざるを得なかったことにも関係していよう。

現地再建がなぜ進まなかったのか

そこで、阪神大震災ではなぜ震災前の地での住宅の再建が進まなかったのか、との素朴な疑問も聞かれる。大都市密集市街地においては、持地・持家の戸建住宅は別

として（こうしたケースでは自力再建がなされた）、民間による被災賃貸住宅の再建の兆しは全くといっていいほど見られなかった。土地や建物の権利関係が輻輳している状況下では、賃貸住宅供給市場は容易に機能せず、加えて、震災後適用された「罹災都市借地借家臨時処理法」（昭和21年法律第13号）が、土地所有者や賃貸住宅経営者（本人自身が被災している）にその経営意欲を失わせることになったことは意外と知られていない。

このように、災害後の住宅供給方式の選択は、災害の規模や地域特性とともに、その国の社会・経済システムと深くかかわっていることを忘れてはならない。阪神・淡路大震災後の復興住宅政策について、さまざまな問題を派生はさせたものの、結果的には、当時の国と自治体の財政状況も現在ほど逼迫していないから可能であった、比較的恵まれたケースといえるのではなからうか。もっとも、現在、この時の財政負担が被災自治体の財政を圧迫する要因の一つになっているのではあるが。

仮設市街地構想への危惧

今後、首都圏などで想定されているように被害の規模がさらに大きく、公的住宅の大量供給のための用地確保ができなかった場合には、一部で提言されている仮設住宅によるいわゆる「仮設市街地」とするなどの暫定的（応急仮設の場合より長期で2～5年、場合によっては10年）な住宅供給策に踏み込まざるを得ないかもしれない。しかしその場合でも、民有地（空地）を利用しようとするなら、その土地所有にかかわる権利調整（あるいは時限的な権利停止）といった法的整備を含めた事前の対応策が用意される必要がある。そうでないかぎり、「仮設市街地」がいかに震災前からの地域とのつながりをもったすぐれた生活環境のものであれ、結局は上物（建築）の計画・設計だけの文字通り画餅に帰することにもなる。この実現のためには、都市計画事業などと同様にあるいはそれ以上に、権利調整（権利制限）と合意形成に多大な労力と時間とが緊急事態のなかで必要とされよう。そのことを可能にするための立法措置とその運用要件についての取り組みこそが急がれるのではなからうか。そうでなければ、実際の被災地にかえって混乱をもたらすことにもなりかねない。

さらに、仮設市街地住宅から時間をかけた恒久住宅への移行についても、すでに定住した住民（多くは従前の借家層が想定される）の再移転を可能にする受け皿住宅

の建設やそのための合意形成にはさらなる困難が予想される。事実、阪神・淡路大震災の場合でも、法決定された都市計画事業を例外にして、国などのいわゆる震災特例措置はほぼ5年が限度で、10年を超えて継続あるいは新たに認められたものはない。震災からの復旧・復興は時間との競争であり、被災者の心情を思えば「ゆっくり時間をかけて」とはとても言えまい。

おわりに

大都市密集市街地での地震被害によって生ずる大量の住宅確保困難者に対する住宅復興施策をめぐるいくつかの課題を紹介しつつ私見を述べてきた。たしかに、住宅復興の多様な選択肢があることは大切であり、震災後の地域社会の連続性の確保に配慮した応急仮設住宅や恒久住宅への入居方式やその居住環境形成の工夫、公的住宅についても直接供給方式だけではなく間接供給方式（民間住宅への家賃補助など）の積極的な導入など、阪神・淡路の場合に十分対応できなかったことも多い。むしろ、震災後さまざまな問題が次から次ぎへと起こり、その対応に追われる様子も間近に見てきただけに、私自身、何とかならなかったかとの思いも強い。それだけに、震災の経験に学び、その反省に立ってこれからの震災とその復旧・復興に備えることの重要性もよく理解しているつもりである。

しかし、復旧・復興過程で生じた個別の課題あるいは事象に関心が偏ってしまって、その全体像（とりわけ大規模災害時の複合的な都市全体に及ぼす影響や制約）が軽視され、「こうあったらよかった」がいつのまにか「こうなければならない」に変わり、その結果、当時の施策自体をあたかも失敗であったかのように断じてしまうのでは、「阪神・淡路大震災に学ぶ」ことにはならないのではなからうか。「なぜ、阪神・淡路で出来なかったのか」、逆に「なぜ、出来たのか」、といった検証とそれに立脚した現実的で実効性のある政策立案が必要とされているように思われる。

震災後の住宅復興施策をめぐる論調に対して、被災地からあえていささかの苦言を呈したが、紙幅の都合で、持家居住層に対する住宅復興施策の課題や応急復旧から本格復興への連続的住宅支援のあり方などについては、別の機会に譲りたい。

やすだ・ちゅうさく /

こうべまちづくりセンター・まちづくり学校長 / 神戸大学名誉教授

岩手・宮城内陸地震

地域の絆



JIA東北支部

大友 彰

死者13名、行方不明者10名、住宅被害1022棟（建物全壊23棟）被害総額1523億円。平成20年6月14日朝に起きた震度6強（M7.2）の地震被害概要である。ここ10年の内に、30年前の宮城県沖地震と同規模以上の地震がくる確率は65%とされている。しかし今回はまったく違う震源地で、岩手と宮城の県境にある奥羽山脈沿いだった。震源の深さは8kmと浅く、地中で断層が動いた逆断層型の直下型地震と発表された。被害の多くは山間部に集中し、中でも荒砥沢ダム上流の山に大崩落が起きた。斜面崩壊によって大量の土砂が河川を堰止めた土砂ダムが一関市、栗原市の北上川水系の7ヶ所で形成され、二ヶ月間ほどはダムの水位の上昇により堰決壊の恐怖と闘う日々であった。また土石流によって栗駒山の中腹にある旅館「駒の湯温泉」では7人が生き埋めになった。地域づくりプランナーの麦屋弥生さんも犠牲者の一人となった。

被災建築物応急危険度判定・

被災住宅相談支援活動報告

阪神淡路大震災が契機となりJIAも災害復旧支援体制づくりに取り組むようになった。宮城北部連続地震、能登半島地震、新潟中越および中越沖地震と、その支援活動は序々に整備され、自治体との連携もスムーズに取れるようになってきた。今回も地震発生翌日には災害対策本部が設置され、現地本部も発足し、16・17日に応急危険度判定調査を行なうこととなった。私も8時すぎに対策本部のある栗原市役所に到着、すでに行政や建築三団体、教育機関の建築士や応急危険度判定士が多数会場

入りしていた。我が「大友・松本班」の調査対象地区は、鶯沢南郷梨木平の21世帯である。9時10分には現地に入り、午前中は11世帯、午後は10世帯の調査を行なった。調査の結果、赤紙は0、黄紙は2枚のみで震度6にしては建物の被害が非常に少なかった。理由の一つには地震波周期が0.5秒以下と短かったため揺れが小さく済んだことと、逆断層型の場合乗り上げた地盤側の被害が大きくなるが、そこに人家が少なかった幸運もあったようだ。また多雪地域だったことも幸いした。ほとんどの家屋の屋根は、重い瓦ではなく鉄板葺きの軽い構造となっていることも被害を抑えられた一つの要因となった。それと被害の実体とは別に調査した内の三棟は不在だった。近所の話では一人暮らしで頑張っていたが「この春に老人ホームに行った」とか、「子供の所に行った」とか、高齢化による過疎が容赦なく迫っていることを実感させられた。

7月2日から13日には「被災住宅相談」が栗駒総合支所で行なわれ、昨年の中越沖地震の現地対応ではなかった。ここは自衛隊災害派遣キャンプ地にもなっているため、何十台もの支援車両トラックや、テントが張られている。支所向いの栗駒伝承館は耕英地区集落の集団避難所となっており、現在（7月13日）でも31名の住民が避難生活を送っている。支所敷地内には自衛隊が設置した臨時入浴場があり、夕方5時から9時まで誰でも利用できるようになっていた。地元のボランティアの若者達もテントを張り、お茶やコーヒーを避難生活を送る人達に提供している。みんなで復興していこう、そんな共助の精神を見たような気がする。3時半に終了した



鷺沢工業高校南斜面の崩落現場

相談のほとんどが罹災証明に関するものであったが、最後の相談者は建物に隣接する裏の崖が崩れており、建物に影響がないか現場を見てほしいと申し入れがあった。話を聞くと応急危険度判定調査を受けていないらしい(他にも何件か同様のケースがあった)。さっそく現地に向かい、現状の分析と対応策を指導した。やはり現地相談が適切なアドバイスが出来る最良の方法と改めて認識した次第である。

活動の中で見えたこと

この原稿の依頼を受け最初に頭に浮かんだのは、「地域の絆」だった。朝日新聞(6月17日付)の記事の一部を紹介しよう。

「けがをしていませんか」余震が続く中、約千人が暮らす耕英地区では隣人の安否を確かめる多くの姿があった。落ちてきた額縁が後頭部を直撃し上着が血で赤く染まっている老人を庭で見つけた近所の住民たちは、手ぬぐいで止血し包帯代わりにシーツを巻き、車に乗



応急危険度判定作業

せて中心部の温泉施設「山脈ハウス」まで運んだ。ハウスでは元看護師の女性らが消毒や湿布などの手当てを始めた。集落とふもとを結ぶ二本の生活道路は土砂崩れと地滑りで寸断されていた。停電し電話も通じない。住民は間もなく集落が孤立状態だと気づいた。無線で救助を呼びかけヘリコプターの到着を待った。ヘリコプターによる救出の順番も住民の話し合いで決定し、最初は地震で怪我を負った観光客や病人の5名を選び、続いて老人や子供を下山させた。一夜明けた15日からは「駒の湯温泉」で捜索活動を続ける消防隊のために食料を持ち寄り、炊き出しを始めた。おにぎりを握った女性は「仲間が救出されるまでは山にいたい」と話した。「耕英は戦後に入植して我々が引き継いできた。この灯を消したくない」。

いっしょに掲載された写真には「捜索活動する救助隊員に、おにぎりやゆで卵を配る耕英地区の被災住民たち＝16日午前4時45分」とコメントされていた。「結」「もやい」といった地縁社会を維持してきた運命共同体は、今も耕英地区のような集落で生き延びてきたように思われる。もし私の住む100万都市仙台でM7.5レベルの地震が起きれば、3万棟の建物が被害を受けると言われている。死者、負傷者も予測不能なほどの数になる。そんな状況の中で復興の第一条件になるであろう「地域の絆＝地域コミュニティ」は、ほとんどが消滅してしまっている。これでは災害に対する備えが出来ていないに等しい。少子高齢化の進む今、地域コミュニティの再構築は急務であろう。今回の支援活動を通じて私が一番強く感じたことである。

大蔵建築設計事務所

災害につよいまちづくり

富士常葉大学大学院
環境防災研究科

重川 希志依 氏

中国・四川地震の被災地を訪れて

1. 災害につよいまちづくりの転換期

平成20年7月1日、国土交通省都市・地域整備局の組織再編が行なわれた。この組織再編は、これまでの施設整備を中心とした組織体系を見直し、人口構造の変化や地域活力の衰退、地球環境問題や自然災害への対応など、まちづくりが直面する深刻な政策課題に対応するために、「政策立案・調整機能の強化」を図ることが目的とされている。このうち、都市・地域の安全の確保に関する総合的な政策の企画・立案業務を集約し、安全・安心なまちづくりに取りくむ体制を強化することを目的として、都市・地域安全課が誕生した。密集市街地の解消、街路や公園などオープンスペースの整備など、まさに施設整備・ハード対策中心で進められてきた国土交通省の都市防災対策を、今後どのような方向性で進めていくかを検討するために、社会資本整備審議会の中に安全・安心まちづくり小委員会がもうけられ、現在検討が進められている。

国土の7割を山地や丘陵が占めるわが国では、限られた平地部分に人や物が集積し、とりわけ地盤条件の悪い沖積平野に人口が集中し、脆弱な木造密集市街地が多く存在している。水害や地震災害に対して危険性が高い場所であることを知りながら、そのような場所を避けて住むことが困難な日本では、道路、鉄道、港湾、河川、ライフライン施設、公園など、都市の骨格をなす施設、都市基盤施設の耐震性や安全性をいかに向上させるかということに力が注がれてきた。地震や風水害に脆弱な地域に生活する人命や財産に被害が及ばぬように、被害を出さない（被害抑止策）ための技術研究には長い歴史と実績がある。阪神・淡路大震災では、高速道路や新幹線の落橋被害や港湾施設の被害、ライフライン施設被害などが発生したが、日本の耐震技術は世界でもトップレベルといえよう。

公共施設の防災性向上は、予算さえつければ実施が可能であるが、一方で私たちが暮らす住宅やまち並みを対象

としたまちづくりは、既成市街地修復型の手法が中心とならざるを得ず、ご承知のとおり、多くの時間と労力を必要とするために、その実現は極めて困難であり、遅々として進んでいないのが現状である。

このような現状を考えると、これからの安全・安心まちづくりのための政策として、いったいどのようなものが望まれるのであろうか？

2. 四川地震の被災地を歩いて

本年5月12日に中国で発生した四川地震は、地震の規模M8、死者69,226人、行方不明者17,923人、被害総額は12兆4000億円に上る巨大災害であった。地震がもたらした断層の総延長は約260kmにわたり、その断層上に多数の都市が存在していた。地震発生から5ヶ月後に、この地震の被災地を調査する機会を得て、生まれて初めて中国を訪れることとなった。

四川省といえば、パンダの故郷と四川料理くらいしか思い浮かばないほど何の知識も持ち合わせていなかったが、四川省の人口は約9000万人と日本の総人口に迫るほどであり、地震の被災地となった各都市は、高層住宅が建ち並び、人が集住していることに驚いた。各都市は、四方を険しい山に囲まれた山奥に立地しているが、日本の農村や中山間地のような構造とは全く異なっている。

学校が倒壊し多くの子どもたちが犠牲になったことで知られる映秀（Yingxiu）、白鹿（Bailu）、漢旺（Hanwang）、北川（Beichuan）の各地域を回って痛感したことは、断層の直上につくられてしまった構造物は、自然の力の前にはなす術がないということであった。日本に比べればあれだけ広大な国土を有する中国であっても、地震断層の真上という、潜在的な危険性が極めて高い場所に人が住まなければならない現実に、改めて驚かされた。さらにマスコミでたびたび報道されてきたように、レンガとブロックを積みあげた耐震性の非常に低い高層建物が多数倒壊したことが、多くの犠牲者を生む



写真1



写真2



写真3



写真4

もう一つの原因となった(写真1)。

非木造の高層建物倒壊は被害は、生き埋め者の救助を困難とし、また大量の瓦礫を生み出す原因ともなった。映秀や漢旺では、両側に3mほどの高さの瓦礫が積み上げられた道が延々と続いており、被災地域はそのままの状態に放置されている(写真2)。また白鹿にある白鹿中学校では、学校の校庭のど真ん中を断層が通っていたため、3mもの段差が発生し、断層上に建っていた学校付属の教会は、跡形もなく崩壊していた(写真4)。四川地震の被災地を歩き、改めて強く思ったことは、災害に強いまちづくりの基本は、安全な土地利用を考えるということである。先に述べたように、国土の狭いわが国では、危険な場所には住まないのが究極の防災対策といっても、「理想はそうかもしれないが、現実的に無理なこと」と一蹴されてしまう。しかしながら、浸水危険、津波危険、土砂災害危険、地震動危険など、その土地の潜在的な危険性が明らかにされている場所では、今後長い時間をかけて土地利用の転換を図っていくことを本気で検討すべき時期にさしかかっているのではないだろうか。

3. まちづくりのための人づくり

狭い日本の国土で安全な土地利用を図っていくことは一朝一夕に解決される問題ではない。何十年、いや何百年という時間が必要となるかもしれない。それと同時に、今現在取り組まれている修復型の防災まちづくりをさらに円滑に進めていくためには、一人一人の市民の、災害に強いまちづくりに対する意識を高めて行く努力を、根気強く続けて行くことが不可欠となる。個人財産に対する執着は誰もが持つものであるが、しかし場合によっては、個々人にとって痛みを伴うものであっても、個人の利益よりも公共の利益、公共の安全性向上を優先すべきこともあることを理解し、そのための協力を惜しまない市民に対するまちづくり教育が求められている。

富士常葉大学大学院環境防災研究科

覗いてみました「他人の流儀」

梅沢良三さんに 「構造家の発想」を聞く



インタビュー風景

聞き手：Bulletin 編集委員

10月号に引き続きCOLONNADEの震災復興というテーマを受け、構造家のインタビューとなりました。今回は梅沢良三さん。長年第一線で活躍し、数々の名建築を生み出していらっしゃる梅沢さんに、自邸「IRONHOUSE」でお話を伺いました。IRONHOUSE(設計：椎名英三+梅沢良三)は昨年竣工し、平成20年住宅建築賞金賞受賞、雑誌掲載も多数と、すでに皆さんご存知の建物。

雨上がりの午後にお邪魔いたしました。

挨拶もそこそこに「まずは見学を」となり、コールテン鋼の外壁を道路から見上げた後、オブジェの如き屋外階段を上って、ミカン、イチジクまで実る屋上庭園を拝見。後、屋内へ。外観の印象が内部まで続き、梅沢さんと椎名さんの美意識がそこかしこに見受けられます。見学を終えて、サンクンガーデンに面する地下のリビングに腰を下ろしました。

まず、構造家の道に進まれたきっかけを教えてください。

一般の人たちとはちょっと違っているんですよ。中学生の時に、体育館の建設現場で鉄骨が建ち上がっているのを見て、エンジニアの道に進もうと思ったんです。「どうやって造るのか?」「その造り方は?」に興味がいき、一旦は普通高校に入学しましたが、中退して工業高校の建築科に進みました。高校での建築の勉強を、僕はエンジニアの視点で見っていましたね。そしてより深く勉強をしようと、大学へ。

卒業後は?

大学卒業後、木村俊彦構造設計事務所に入所。8年間勤めた後、実は1年間だけ独立をしまして(笑)丹下事務所へ。アルジェリアのオラン大学建設のためです。「木村事務所時代に構造を担当していたオラン大学の現場監理をやってくれないか」と電車の中で頼まれて、その場で行く!と即決しました。思ったことは直ぐにやりたいタイプなんですよ。

その当時の構造家は、どのような立場だったのでしょうか?

今と同じですよ。建築家と構造家は、それぞれの立場で情熱を傾け、素晴らしい建物を創りあげていた。木村事務所にいた頃に、そうそうたる建築家と一緒に仕事をしていただけ、その緊張感は凄かったですよ。真剣勝負です。

エンジニアではなく、全体の設計やコントロールをする建築家も良かったかな、などと思われたことはありませんか。

いやいや僕は逆でね。木村事務所へ入って現場に行くと、建物をつくっているのはエンジニアだと思ったね。ど

うやってつくるのかという筋道をたてたり、検証したりするのはエンジニアだからね。

空間とか素材とかがあって人間を感動させたり、芸術の領域を建築家がつくりだしているのを知ったのは後からですね。田舎育ちで体育館を見てエンジニアになりたい!と最初に思ったくらいだからね。

建築設計には初期の段階から関わられますか?

建築家っていうのは、施主との話でスタートし情報を収集して、頭の中で色々考える。スケッチを始めるまでに、まず時間がかかっている。線をいっぱい引いたり模型をこねくり回してうんうん唸っているところに、私が入ったって時間の無駄なんですよ。そんな時は「考えがまとまってから、連絡を下さい」とおいてきちゃいますね。(笑)

では、ご自身が施主でもあったIRONHOUSEの際は如何でしたか?

ここにはもともと住んでいたから、建築家よりはるかに土地や周辺環境に詳しいんですよ。30年以上前に、木造の家を建てて住み始めたんです。ある建築家に依頼したんですが、構造については「施主が構造家だから大丈夫だろう」と言われてきた。ところが、地震がきても大丈夫かな?とだんだん心配になってきた。

ここで、当時の家が掲載された雑誌を見せていただく。

L型になっていて、南側と西側は完全にオープン。トップライトもあって気持ち良かったんだけど、この南側と西側の構造がちょっと弱いな。

で、IRONHOUSE。正方形に近い敷地を有効利用し気持ち良く住むのはL型だろうと。ただ、道路側に中庭をもっていくと落ち着かないと思い、そちらには背を向けるような形になってしまった。鉄の壁で閉鎖的になってしまったので、配慮して屋上庭園、それも高さを違えて緑の段々畑のようにした。プランニングや形状については、設計者の椎名さん



IRONY SPACE



IRONHOUSE

覗いてみました「他人の流儀」

このコーナーは「独自のスタイルで活躍中の方にお話を伺い、その秘訣を探り出そう!」という企画です。話を聞いてみたい、あるいは興味あるテーマなどがありましたら編集委員会までお知らせ下さい。

から提案があり、選択しながら詰めていったので、その点では一般の施主と同じだね。

ただ、構法は最初から決まっていた。数年前に建てた事務所 IRONY SPACE で取り組んだ鉄のサンドイッチパネル構造。それを住宅用に改善しながら、実験し、一般解にしていきたいと考えていた。構造体としてだけでなく、内装も含めながら、充分住めるのだと証明したかった。そのためにも、住宅の要素、建具、ベランダ、庇、屋上庭園、外部階段、トップライトを取り入れ、断熱性能にも考慮した。そして、重要なのが100年以上、200年持たせる超長期住宅であること。

事前に頂いた資料に「住宅シェルター論」超長期住宅がありましたので、その辺りをお聞かせください。

「構道家：梅沢は鉄」、というイメージが強いようですが、長持ちさせる材料として選んだんですよ。政府が二年ほど前に打ち出した200年住宅は、自分が言っていたこと。それが「住宅シェルター論」ですね。

日本の木造住宅は寿命が約30年と短い。これはエネルギー、環境の問題でもある。その度毎に大量のごみが出るわけですよ。そして社会資本の充実といった点からも、財産として住宅をストックしていかなければ、人も国も豊かにはならない。経済的負担だって大きい。建築は価格ではなく価値だという基本が、社会の中で抜け落ちていていると思うね。

構造設計は社会の中でどう位置づけられるのが望ましいとお考えですか。建築士法の改正も絡めてお話をください。

数日前に試験結果が出て構造設計一級建築士になりましたよ。まあ、資格として制度化されるのは、役割が社会に認知されるという点も含め、悪いことではないと思う。構造計算偽造事件でイメージは悪いかもしれないけれど、縁の下の力持ちであった構造設計者、エンジニアが表に出てきた。結果、施主に会って直接説明する機会が増えたことは歓迎だね。悪い面として、余計な作業が増えた。これは改正が不完全だということで、運営側の柔軟性に問題があると感じている。今までは、多少の自由があったが、今は全てを升目にあてはめようとしている。これは、日本のいい伝統じゃないよね。エンジニアを尊重しなくては。まあ、運用の仕方に問題があり、これは改善されていくと思う。そのためにも努力が必要だね。

作品を拝見しますと、線で構成する構造から面構造へ移行されてきている印象を受けますが。

実はね、一つなんです。線で造るのも、面で造るのも。僕は線ではなく面をつくりたいと考えてきた。必要なのは柱・梁ではなく、床や壁。それを支えるのが柱だったりするだけで。構造として、鉄はもともと線だったりするけれど、それで面をつくれなかつと一歩考えてきたんだよ。

それが、自社開発されたサンドイッチ折版(パネル)構造に繋がったのでしょうか?

パネルは強度があれば構造体になるわけで、サンドイッチ折版。つまり、折版の両側に鉄板でなく、胴縁をはり付けて二次元の方向に強度を持たせたパネルがそうです。

天野製薬岐阜研究所(設計:黒川紀章建築都市設計事務所+リチ

ャード・ロジャース・パートナーシップ・ジャパン)では屋根に用いた。アーチのキールにサンドイッチ折版を吊るしたことで、フラットな天井を確保し、梁などで途切れさせることのない連続した空間をつくりあげている。

他建物ではいかがでしょうか?

木造でも面がつくれるんだよ。例えば、無垢の角材を何本か重ねれば柱・梁そして耐震壁ができる。お互いの間に大きなリングを入れてずれないようにし、束ねればいい。接着剤を使っていないから、集成材ではなく集積材だね。そうすれば耐久性も期待できる。考えれば、まだまだ色々できる。

藤沢市湘南台文化センター市民シアタードーム(設計:長谷川逸子・建築計画工房)では、球体の外壁に鉄板を使っている。三角形のパネルを全溶接して球体面を造りあげている。

エンジニアはね、何かをすると、それをずーっと頭に留めて持っているんだよ。一つのもを造る。つまり実現できたものは、必ず他にも使えるということだね。

設計にあたって一番大切にされていることを教えてください

それはもうインスピレーションですね。

修行をしてきてね、最終的にそう思う。湧かない時もあるし、その方が多いかな。でも、それが湧く内は、まだまだ大丈夫と思うし、自分を凄く勇気づけるよね。

今後に向けて抱負をお聞かせください。

200年住宅が一つのテーマ。社会的には木造の長期住宅が望まれているし、そちらの方が主流になっていくと思う。

インタビューを終えて

以降もお話は尽きず。IRONHOUSE 第2号は?とお聞きすると、「200年住宅を望む施主の方には是非。サンドイッチ折版の両側が鉄である必要はないから、内側は合板にすとか。いっそ板がなくてもいい。断熱材を吹付けるとか……」と幾らでも湧き出すアイデア。

長年、第一線で活躍されてきて、それでも衰えないヴァイタリティ。「インスピレーションが湧く内は、やり続けますよ」と言われたその顔には、少年のたくらんだ笑みと目の輝きがありました。

聞き手:鈴木利美・湯浅剛・池元真克・三上紀子



梅沢良三(JIA会員)経歴

1944 群馬県に生まれる

1968 日本大学理工学部建築学科卒業

以降 木村俊彦構造設計事務所、丹下健三都市建築設計研究所勤務を経て、

1984 (株)梅沢建築構造研究所を設立

受賞:松井源吾賞、日本構造技術者協会賞、日本構造技術者協会作品賞、第33、39、41回BCS賞、グッドデザイン賞、東京建築士会住宅建築賞金賞

「温故知新」

先達から学ぶ

夢中になった科学万博「迎賓館」の設計



高橋 詠一

和紙の名工に無謀なお願い

建築家協会から温故知新という欄への投稿依頼を受けた。考えてみれば私は今年で84歳になるから確かに古い。その古い者が60歳代70歳代80歳代のそれぞれに関わった建築の中で、その時私を夢中にさせた仕事について雑感を書くことにする。念のためそれぞれの時代の夢中仕事を挙げれば、

- ・60歳代：国際科学技術博覧会協会本部別館（ナント長タラシイ）別名「迎賓館」
- ・70歳代：パークドーム熊本：当時くまもとアートポリスコミッショナーだった磯崎新さんを審査委員長とする指名コンペ。
- ・80歳代：70歳代末から考え続け現在も進行中のプロジェクト、SFS-21超免震構造。

以上の中から紙面の都合上、60歳代の万博「迎賓館」について記憶を甦らせながら書くことにする。

60歳代：科学万博「迎賓館」（仮設）について

建設省からこの建築の依頼を受けたのは59歳の時。出来たのが61歳の春2月。取り壊されたのはその2年ほど後だから短命な建築だった。けれど世に言う「短命な子ほど思い出は残る」と。この建築もまた私にとってかけがえのない思い出が多い。皇室を始め世界からの賓客をこの建物に迎える政府代表はフランス大使から帰任されたばかりの井川克一さんだったが、当面の施主である井川さんの建築に対する読みの正確さと理解力は抜群だった。

私は当時この万博に対してはその時代の日本の科学力を世界に示すプロパガンダ、言わば一つの虚構だと考えていたから、この迎賓館もそれに対するもう一つの虚構だと考えた。だから形態は考えられるだけシンプル。一本の軸線上に車寄せ・ロビー・ラウンジ・レセプションホール、そして囲まれたレセプションテラスを一直線上に、つくられた水盤の上に配置した。それら一つ一つに9.6 m x 9.6 mのグリッドを与えそれぞれの架構をその機能に従ってデザインすることにした。

この構想がほぼまとまった時、この建築の内外装を如何に調えるかが問題であった。外壁は当時出始めたばかりのガルバリウム鋼板で統一することにした。ややピカピカした感じ。これに対して内部は純和風を考えた。丁度その頃恩師の吉武泰水先生から隣国李朝時代に建てられ現存する「演慶堂」の内部紙貼りのしとやかさについて伺う機会があり、内部はやはり和紙

貼り以外にはないと決めた。これからが大変だった。恥ずかしながら私は和紙についての知識は皆無に近い者だったから。

つてを求め先ず京都在住の和紙デザイナー伊部京子氏に逢い、そして遂に徳島県山川町にアトリエの在る和紙名工藤森実氏にたどり着き、早速山川町に飛んだ。藤森実氏のやさしい風貌に接した時、これで出来たと思った。その安堵感から僕が考えていた和紙の姿を矢継ぎ早にお話した。けれどその瞬間から目の前の藤森さんの顔は見る見る曇り暗い影が漂い始めた。僕のお願ひした骨子は以下のようなことだった。

「先ず方形天井の角度に合わせて菱形の紙を漉いてもらいたい。そしてそれぞれに床から天井まで藍と蘇芳の2色の草木染めで仕上げたい。そして藍は21色に蘇芳は14色に濃から淡へのグラデーションに染め分けてもらえないか。」

和紙に関して全く無知な人間の口からこれほど無謀な願ひが出るとはさすがの藤森名人も思っていなかったのだろう。その日は全くお答えのないまま「暫く考えさせて頂く」というお返事に只々頭を下げて東京に引き返すしかなかった。

後になって伺えば、第一に菱形の和紙を漉く等ということは和紙の歴史上にも全くない！（僕は「菱形の漉き放し」とお願ひした）第二に、藍と蘇芳の色を夫々21色と14色にグラデーションするなど計算して出来るものではない！

要するにほぼ絶望的なお願ひを同時に二つもしたのだ。一日千秋の思いで待った僕に徳島から電話が入ったのはそれから一週間以上経っていた。ナントカ似たようなものが出来ました。

「雲の上を歩く」とはこのことだと思った。その翌日の徳島往きの機上での心境だった。再び藤森さんの晴れやかなお顔を見たその日から僕たちの人海作戦が始まった。当時私は大阪芸大の建築学科にも職があったから、建築学科の学生の動員は朝飯前だった。早速藤森さんのアトリエ近くにある小学校の体育館を拝借し、その体育館の屋根トラスの下弦材にメガホンを片手

にしがみつき、10 mほど下で待機している学生たちを動かしながら、床から天井までの起こし図の上に一面数百枚の菱形の紙をその色のグラデーションに従って位置を決める。汗が落ちないように手ぬぐいで顎から顔に結びながら。四国の真夏の暑さがその時ほどさわやかに感じたことはなかった。最後になりましたが藤森さん本当にお世話になりました。（株）第一工房



国際科学技術博覧会協会本部別館レセプションテラス
（『建築文化』465号より）

抱負を語る

ネットワークづくりと
発信を

三上 紀子



専門は住宅設計で住空間の計画が主な仕事です。最初は戸建住宅や集合住宅の設計をしていました。その後、病児保育施設の計画に携わったことをきっかけに、病院や学校・保育園についても広く「生活空間」と捉えるようになり、現在では企画調査や監修も含め、建物完成までの一連のプロセスに関わることを仕事としています。

11年前にフリーとなり個人事務所を開設しました。仕事を潤滑に進めていくためには、縦のつながり横のつながりが大切だということを日々痛感しています。普段一人で仕事をしていると、どうしても偏った考え方や行動になってしまいがちなので、日頃から様々な分野・立場の人と話をし行動を共にして、その中で自己研鑽することを心がけています。これまでも地域の若手の集まりや女性の建築士の会などに参加してきました。建築家の団体である JIA は学生の頃から憧れでした。昨年、先輩の紹介にて入会させていただき、現在は住宅部会に所属しています。活発な部会活動にとても刺激をうけています。

これからは、JIA での活動を通して社会に何か発信できるようになりたいと思います。建築はまだ一般の人にとっては遠い存在と感ずることがあります。建築家をもっと身近な暮らしのパートナーとしてもらえるよう、私達から働きかけることが大切です。そのためには仲間づくりも大切だと思っています。JIA ではそのような出会いや交流を期待しています。

建築ははじめから決まったかたちがあるのでもなく、何か答えが決まっているものでもありません。生活する人の年齢や計画条件によっても愉しさが異なります。その愉しさや嬉しさ、そしてそれを体現化することの素晴らしさを、これからもクライアントや周りの人々と共有しながら、この先この仕事を続けていきたいと思っています。

レジオン・コンサパティブ(株)一級建築士事務所



病中のケアと保育の両機能を求められる病児保育施設の計画。人の心理や行動と空間との関わりを「環境デザイン」という観点よりとらえ、行動観察調査を行ない、平面計画を提案した。



人を迎える場所は住まいも施設も同じ。大切な空間として設計したい。



オーダーメイドマンションのプランニング。構造や設備等の制約をクリアしながら、そこに求められる生活空間を体現化する。

支えられて 10 年

下平 万里夫



建設会社の設計部に籍を置いていた若い頃、設計事務所の所長さん達はとてもまぶしく輝いて見えました。そして、いつか自分も自分の事務所を持ち、誰にこびることもなく自分の考えを堂々と貫いた設計をしてみたいと思ったものです。しかし、いざ独立してみると、営業も見積りも初めての経験ばかりで悪戦苦闘し、裸の自分の力の小ささを思い知らされました。私は設計事務所で働いたこともなかったので、構造・設備の事務所や信頼できる工務店もなく、もちろんスタッフもおりませんでしたので、本当にゼロからのスタートで不安一杯の独立開業だったことを覚えております。

しかし、この経験のお陰で、仕事というものは一人では出来ないこと、デザインはデザイナーや建築家だけでなく、経理や総務や近くの写真屋さんといった沢山の人の力と力を合わせて作るものだ気づくことができました。

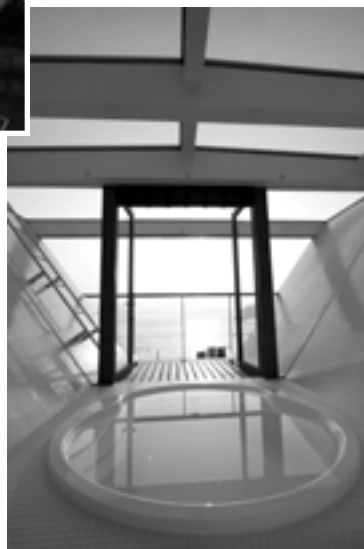
それから10年、手探りで施工者や協力事務所を捜し歩き、仕事のツテを探して地域の会合や大学のOB会に顔をだしたりして、改修工事から店舗デザインまで、来る仕事は片っ端からこなして日々忙しく走り回ってきました。お蔭様で、最近になってようやく数名のスタッフも来てくれて、信頼できる仕事の仲間もすこしづつ出来てきました。

そんな頃、先輩から建築家協会の活動を聞き、若い頃あこがれた建築家に少しでも近づきたい思いから入会させていただきました。どうぞ宜しくお願いいたします。

(株)MARIO DEL MARE 一級建築士事務所



ルーフバスの家外観
バスルームから海を
望む



委員会活動報告

アーバントリップ実行委員会

提案型都市建築を訪れる

第57回アーバントリップ



吉田 信一郎

今回の見学のテーマは、「新しい施設を訪ねて 環境、自然、創造、人の交流、使う楽しみ、提案型都市建築」というものであったが、実行委員会の皆様のご努力により、まさにこのテーマに沿った建築作品が用意されており正鵠を得た見学会となった。「ふじようちえん」に行ってみると驚いたのは、楕円形の屋根の上を元気よく走りまわる多数の園児たちの嬉しそうな表情であった。特別な遊具があるわけでもない無限軌道の楕円平面の中をなぜ園児たちは単にぐるぐると走り回るだけでかくも嬉々となるのか、児童心理学の知識のない私にはわからないが、その他の部分を見学した限りでは、造り込みすぎないことが幼児教育にとっては非常に有益であることが推測できた。建物の中には3本の大きな既存のケヤキが屋上を貫いて残されており、走りまわりながら木登りをしたり、木の周囲の落下防止ネットの中にあえて飛び込んで遊んでいる園児たちの楽しそうな姿が極めて印象的であった。

次に訪れた「福生市庁舎」も1階をオープンな市民サービスのための「フォーラム」に使用し、その屋上を「丘の広場」として市民に開放すると同時に、格子状の外壁が印象的な上部建物は、Pcaの柱とT字梁で無柱の大空間を実現している。実際は5階建ての建物が外壁格子により10階建て以上に見えるから面白い。コンペの

当選案どおり、公園と庁舎が一体となった提案型都市建築が実現したものであり、今後は煉瓦タイルのツインタワー庁舎として市のランドマークとなるであろうことが容易に想像される興味深い建築であった。

最後に訪れたのが「武蔵工業大学新建築学科棟 # 4」であるが、この建築も大学校舎の規制概念を根本から問い直した力作であった。建物に入ると突然出現する大空間：吹き抜け上部の院生の製図室、および「デザインステージ」と名付けられた階段状のスペース、並びに吹き抜け下部の学生の製図室とプレゼンテーションスペースの全てが一体となった「グランドギャラリー」、に驚かされる。当日の説明もこのプレゼンテーションスペースで行なわれたが、周りで作業中の数百人の院生・学生たちは一切お構いなしであった。さらに驚かされたのは、研究室群が収納家具をパーティションとして置いただけのオープンな空間として造られていることである。従来の閉鎖的な研究室の概念を覆し、分野の異なる大学での研究環境をここまで構築した設計者の並々ならぬ手腕には脱帽せざるを得ない。

以上三つの建築を見学したがいずれ劣らぬ大作であり現在の日本の建築界を代表する作品として未長く語り継がれることであろう。

NTT都市開発(株)



ふじようちえん
設計：手塚貴晴 + 手塚由比 (2007)



福生市庁舎
設計：山本理顕設計工房



武蔵工業大学新建築学科棟 # 4
設計：岩崎堅一 武蔵工業大学岩崎研究室

交流委員会

多彩だったこの一年

トリノを巡る旅とJIA東北大会



Dグループ幹事
立石 博巳

今年のJIA 関東甲信越支部の活動を振り返ってみると実に多彩で多様であった。春の蓼科での交流委員会拡大幹事会、正会員との合同会議、出江新会長の就任、UIA トリノ大会への参加、JIA 建築家大会 2008 東北への参加、アーキテクツ・ガーデンへの参加等々があった。

UIA 大会については正会員の方々が今までに報告記事を多く書かれているので、私は旅の印象に触れたいと思う。

トリノを巡る旅

6月28日昼に成田を出て、エールフランス機でパリ経由トリノへ向かう。古色蒼然とした古城のホテルに着いたのが夜中で、結婚式を終わった花嫁が現われ、これは幸先が良いと思い、チェックインをしたのが馬小屋を改造した客室。同行の日向野氏と爆睡。

早朝起床。のどかなイタリアの風景が眼前に広がる仲々の趣きのあるホテルのレストランで古城の領主気分で朝食をとり、専用バスで古都アオスタへ。アウグストスの凱旋門やロマネスク様式の教会！ 等々、市内を見学。トリノへ戻り、大会会場のリングットで大会登録をし、豪雨のあとヴェンタリリアレガーデン宮殿の開会式に出席。日本からも多数が参加して盛り上がった。翌日は、トリノ市内視察、大会参加展示視察、カバレリツアのジャパンナイトに出席。国交省を始めオールジャパンのメンバーが参加し、盛大なレセプションであった。その翌日からは世界遺産のチンクエッテッレへ向かう。個人であれば中々行けない場所で、伊平支部長の企画は本当に素晴しかったと思う。ポルトフィーノ（世界中から人々が集まるリゾート地）のホテルスプ

レンディッド（超高級ホテル）で昼食をとり、豪華クルーザーが錨を降ろす海岸や中世の施設を探訪。アメリカ人母子と交流。モンテロッソへ。翌日か



トリノ市内



トリノ大会オープニングパーティー
ヴェンタリ・リアルガーデンにて



チンクエッテッレ
ポルトヴェネーレ



ジェノバ



JIA東北大会
せんだいメディアテーク会場入口

ら列車と船を乗り継いでチンクエッテッレ（五つの土地）へ。五つの村を巡り素晴らしい自然景観をたんのう。ジェノバでレンゾ・ピアノ設計の各施設と周辺の景観を視察。マジョーレ湖畔ホテルレジーナパレス（落ち着いたクラシック調）へ宿泊し、ミラノ、パリ経由で7月5日に帰国した。今回は大変有意義でしかも内容のあるツアーで、UIA 東京大会へ向けての準備に欠かせない資料収集とノウハウを獲得できた充実した旅であった。

JIA東北大会

建築家大会 2008 東北「風土・建築・まち 開かれた建築を目ざして」が杜の都仙台で開催された。10月17日仙台に入り、せんだいメディアテークにて大会登録。13時からの記念式典、出江会長他の挨拶、名誉会員の授与、基調講演、パネルディスカッションが行なわれ、18時より勝山館にてレセプションパーティーが行なわれた。それに先立ち蔵舞台にて現代神楽が演じられ、知り合いのアラン・ウェスト氏も出演した。出江会長、松本支部長他の挨拶があり、多数の出席者で大変盛んに催された。東北地方の名物料理、名酒など多彩であった。大いに盛り上がり二次会などへ散って行った。

18日、東京エレクトロンホール宮城にて9時30分より「開かれた賛助会を目ざして」をテーマに全国賛助会員サミットが開催された。関東甲信越支部は30名弱の参加で、各テーブルに三人以上が入って討議に参加した。他支部・地域会の活動状況をつぶさに聞いたり、意見を出したりで、支部以外の正賛会員と交流がはかられたが、もう少し時間が必要ではないかと感じた。

最後に宣言文がまとめられ、散会した。その後、支部メンバーと「定禅寺通りインスタレーション」「フォーターチ東北各地域会の出展」を見学し散会した。今回の大会

もJIA 会員のパワーと情熱を結集した素晴らしいものであった。 (株)ヒガノ

委員会活動報告

保存問題委員会

文化財の宝庫・上野界限を歩く

アーキテクト・ガーデン街並みウォッチング2008年



関東甲信越支部
保存問題委員会
委員

上遠野 公一

今年も恒例となった保存問題委員会主催による「アーキテクトガーデン街並みウォッチング」が10月4日に行なわれました。その模様を報告したいと思います。

西洋美術館は言わずと知れたル・コルビュジエの設計によるものです。このたび世界遺産の暫定リストに指定されたこともあり、記念として今回の集合場所に選びました。また同じく重要文化財にも昭和の建物でありながら、指定を受けました。その正面南前にある東京文化会館は、ル・コルビュジエの日本人の弟子、前川國男の作品であります。向い合って対峙することに奇遇を感じるものです。

今年コースとして選んだ上野公園界限は数多くの重要文化財の宝庫でもあります。今回見学したものだけでも、西洋美術館 - 国立科学博物館 - 国立博物館本館 - 同表慶館 - 奏楽堂日本近代音楽館 - 寛永寺と続きます。もともと寛永寺の境内だったところですが、上野戦争で焦土となりその後現在の姿に変遷したものです。現在の国立博物館前の噴水のある池の辺りに本堂などの伽藍があったとされております。

見学した中で重要文化財ではありませんが、(十分実力感じさせる建物ではありますが.....) 国際子供図書館は、JIA 会員で実際に監理をされた渡辺様のご案内で、館内を見ることが出来ました。日建設計と安藤忠雄氏が近代的技術を駆使した免震による耐震改修と明治時代のレンガ建築の傑作との調和が見られる希な建築物です。



国立科学博物館

奥まっているせいか、黒田清輝記念館ともども訪れる人が少なそうなのは大変残念です。午後の初めの見学先寛永寺は、今年のNHK大河ドラマの篤姫が永眠していると

ころです。次の谷中墓地では、徳川家代々の側室のお墓の立派さに感嘆し、渋沢栄一の墓前ではその財力にあやかろうと手を合せてまいりました。行き止まりの天王寺はRC造と木造の組合せによる現代風本堂ですがバランスがとれ、大変見ごたえがあり思わぬところで感心した次第でした。

彫刻家である朝倉文夫が設計した彫塑館は、建築家ではなく素人ではありますが、コルビュジエの提唱のような、屋上の庭園、3階の重厚な和室、回廊によって囲まれた中庭、数寄屋風の入った和風の自宅、どことなく全体としての調和やバランスは素人なりではあるのですが、間取りのおもしろさ、感性は特筆するものが感じられます。また外壁コンクリート打ち放しのブラックの彩色はまるで現代建築の趣でありました。

最後の谷中銀座は、単なる観光地化された商店ではなく、近隣の人々の生活のための商店と観光客用の配慮とのバランスがとれた商店となっており、昔の昭和中期頃のどこにでもあった街中の商店街の活気のあった頃を彷彿とさせるもので、私達世代は懐かしさを感じられるものです。

懇親会として偶然入り込んだ「夕焼けだんだん」(階段の名称)のわきにあるイラン・アゼルバイジャン料理店は、イラン出身の店長が営業する絨毯敷きでイスもテーブルもなく座って食べる店でしたが、当委員会副委員長の倉澤氏が中近東、インド、パキスタン等に旅をしたことがあるので気に入られまして、水タバコや手で栓を開けるビール、そしておいしい特別料理を驚異的安さでたくさん出していただき、異国情緒をたんのうすることができました。近くに行く機会がありましたら、この手の店が好きな方にはお薦め致します。

今回参加できなかった会員の皆様にも、下町情緒と明治風情の残る上野、谷中界限を一度ゆっくりと散歩することをお勧めして、参加報告とさせていただきます。

かとおの・こういち/筑波設計

保存問題神奈川大会

横須賀の近代化遺産へ

「近代化遺産を市民にひらく」



保存問題神奈川大会
実行委員長

倉澤 智

はじめに

来年2月28日(土)、3月1日(日)に、神奈川県横須賀の近代化遺産を取り上げた保存問題神奈川大会(以下大会)が開催されます。今年4月19日の視察からはじまり、6月27日には堀勇良氏によるスライドレクチャー、6月29日には浦賀、猿島へ、8月23日、24日には保存問題委員会との理論合宿を横須賀で行うなど、JIA 神奈川地域会実行委員会のメンバーと保存問題委員会委員を中心として横須賀開催の準備を着々と進めています。この稿では、大会の内容の概略をJIA 会員の方々に報告したいと思います。

なぜ横須賀なのか

横須賀は1865年(慶應元年)に幕府海軍の艦船修理を行なうため、横須賀製鉄所の建設と共に近代的都市へと急激に変貌した軍都として出発しました。明治になり、海軍工廠の設置に伴い、インフラストラクチャーの建設や海軍施設など、当時の最先端の技術による建築物が建設されています。こうした背景から、横須賀を取り上げることで、神奈川における近代建築を含む近代化遺産の認識を深められること。また横須賀では、2003年に市内の近代化遺産専門調査報告書がまとめられたにもかかわらず、市民や専門家においても独自の近代化遺産を数多くもつ地域として十分認知されていないことが開催地として横須賀を選定した大きな理由です。横須賀の近代化遺産が認知されていないのは、米軍基地内や工場内に存在にするなど、日常の中で目に触れることがなく、その多

くが「封印された近代化遺産」(清水慶一)であることが大きな障壁となっているからです。今回、大会のテーマを「近代化遺産を市民にひらく」として進めているのは、これらの封印を解き放ち、幕末から昭和初期の近代建築、産業遺産など、横須賀に残る近代化遺産を「見ること」「知ること」「考えること」を通して、横須賀の近代化遺産を様々な立場の方々に認識してもらい、議論できる場を構築したいからです。

浦賀 もうひとつの横須賀

浦賀はペリー来航による開国の舞台となった街として広く知られていますが、江戸時代には、干鰯(ほしか)の市場や廻船問屋など相模国の中で小田原に次ぐ街として栄えた経緯があります。一方、その浦賀において、1899(明治32)年に浦賀ドック(浦賀船渠、後に住友重機械工業)という造船所が完成させ、近代造船の操業が始まりますが、2003(平成15)年に閉鎖され、現在、浦賀港を取り囲む造船所跡地は、街の中心を閉鎖的な景観に変えてしまっています。こうした状況を踏まえ、大会2日目では、会場を浦賀に移し、開国からはじまり、近代以降ひとつの時代が閉じた街浦賀において、浦賀ドックの保存活用をテーマの中心とし、より具体的に近代化遺産について議論したいと考えています。

おわりに

今回の大会では、近代化遺産とは土木や軍事、産業遺産だけでなく建築遺産を含むものであることを知っていただくと

同時に、関東甲信越地域に残る近代化遺産を各地域でとらえなおし、保存活用について議論する上で参考にしていただけるような大会にしたいと考えています。特に神奈川県においては、横浜を踏まえ、広く幕末以降の日本の近代建築を含む近代化遺産を再考するような大会にできればとも考えています。JIA 関東甲信越支部会員の方々が一同に集まることのできる本大会は、18回目の歴史を迎えます。多くのJIA 会員の方々に参加いただき、実りある意見交換ができるよう準備を整えていきたいと思っています。

(有)倉澤智建築事務所



浦賀ドック全景

委員会活動報告

UIA 東京大会関東甲信越支部準備委員会

UIA 大会： トリノから東京へ



UIA東京大会
関東甲信越支部
準備委員会 委員長
上浪 寛

今年7月に、2011年UIA東京大会前の最後の大会となるUIA大会がイタリアのトリノ市で開催された。日本から200余名が参加し、国際大会の雰囲気を経験してきた。大会、総会を合わせて7日間に渡る期間中、メイン会場リンゴットを拠点とする様々な会議やシンポジウム、総会、巨大な会場でのオフィシャル展示等が核イベントとして盛大に開催された。世界から集まった建築家の登録参加数は9000人を超え、若い建築家、特に若い女性の参加者が目に付く活気のある大会であった。リンゴット会場イベントの他に、市内各所でオフコンgresイベントが開かれ、多くの市民参加プログラムが計られており、建築家団体の閉ざされた大会にとどまらず、文化としての建築がイタリア市民にとって身近な存在であることがうかがえた。日本からはコンgresホール前の一番人通りの多い場所で日本ブースを設営し、約100m²の内半分を、安藤忠雄氏の考える東京の未来、他を設えた東京都紹介とし、半分を建築五団体の優秀作品展を主な展示とするJOB（日本組織委員会）の紹介を行った。会場でもひととき目をひき、見やすい良いデザインのブースであったため、多くの来場者がひっきりな

しに来ていた。市内中心に建つギャラリー「カバレリッツァ」ではイタリア企業と地元ピエモンテ州の協賛を得て会場費やパーティー費用を提供していただき、オフコンgresイベントの一つとして日本の建築家400作品展（NHJA = New Horizon of Japanese Architecture: BCSも含めたオールジャパンの建築作品展）の常設、ジャパンナイトパーティー、ペチャクチャナイト等のイベントを催し、多くの若いイタリア人建築家や学生が参加するイベントが毎夜行われた。市内では普段見学が許されない建築物の見学会「Open Architecture」が開催されたり、大会主催エクスカーションツアーとして古い工場の再生プロジェクト見学など、工業都市トリノ市の文化を伺わせるツアーが催された。閉会式ではトリノ市長から東京への引継が行われ、いよいよ3年後に開かれるUIA東京大会の本格的な準備が始まった。

2011年にはJIA先達の夢であったUIA大会が日本で開かれる。そのためにJIAはUIAと契約した。大きな目的の一つは、UIAという外圧をうまく利用していかん建築家職能に関する法律の成立に繋げるかだろう。たとえば職能法成立に繋がらなかったとしても、現行法規の改



大会基調講演



次回開催都市への移譲式



NHJA展（カヴァレリッツァ）



日本建築展・東京展（リンゴット）

正で建築家職能を規定する整備ができる可能性がある。少なくともそのような流れを作る大きなチャンスがこれからの3年間だ。日本の社会は外圧がないと動かない＝外圧があると動く可能性がある。そのためには一般社会にUIA大会を認知してもらう事が不可欠だ。UIA大会は本来「World Congress of Architects」だが、オフコングレスを含めたUIA東京大会は「World Congress of Architecture」とすることで、一般にもわかりやすく参加しやすいイベントとする準備が進んでいる。まずはオールジャパンとして建築業界が纏まって取り組むことが大事だが、建築という一業界の集まりではなく社会的ムーブメントにしないといけない。振り返ってみると、これまで2年間のJOB執行部の動きは建築業界を纏めることに終始労力を割いてきたと思う。これは決して無駄な苦勞だと思わない。これらの具体的な活動として、関東甲信越支部準備委員会が準備を進めた、UIAトリノ大会オフコングレスのNHJA展は建築五団体から個人名の設計者の名前が初めて一堂に会した建築作品展となった。まだ実現していないが、最近他会の委員会から非公式にUIA東京大会準備の実務活動への参加申し入れがあった。またJOB組織の中でも各団体がJOB各部会への会員参加を公式に検討しているのは、今までの努力の成果だと思われる。オールジャパン組織というにはさらなる努力が必要だが、積極的にオールジャパン活動を展開すべき時期に来ている。財務的には残念ながら当初の計画通りとは言い難い状況だ。これまで2年間の大会

参加事前登録はなんとか当初の予定通り(800人余り)集まったが、その後は海外通貨レートが2年前と大きく乖離したこともあり正式な登録募集(Web上で世界からの参加登録)ができない状態であった。直近のUIA理事会で大会参加登録費用額が確認できたため、今後はWeb上での正式登録募集が始まることと思われる。また、大手設計事務所からの寄付は予定通り集まりそうだが、建設業界やメーカー各社からの寄付金が思惑通り集まらない。3月の馬場璋造氏の記事によれば、まずはJIA会員が早期に寄付を集めてみせるべきだろうということだ。外部から見ればUIAと契約しているのはJIAだから大会開催のメリットがJIAに一番あると見られるのは当然かもしれない。JIAの一般会員にとって、自分たちのためになる大会であるという大会の意義に十分賛同できない、または実感していない会員は、大会参加登録に積極的にならないし、ましてや寄付には納得できないと思われる。寄付金募集活動は十分な情報開示と時間が必要だろう。また、UIA大会を牽引しなければいけないJIAにとって、JIA会員意見の集約によるUIA準備活動の活性化が大切だと思う。UIA大会で取り上げる「建築」は一般社会の人にとっても身近なはずだし、ましてや地域会に代表される我々の活動はやり方によっては一般企業の相乗りも十分見込めるはずだと思う。UIA大会を、建築業界のみならず一般社会を巻き込んだムーブメントにすることがすなわち、財務的にも成果を上げることだと思う。大会のテーマ「Design 2050」は市民生活の標語になりうる良い言葉だ。サステナビリティ、環境というテーマだって価値観を変えることで楽しめる。近年広く社会に定着した感のある「LOHAS」は同じサステナビリティに類したトレンドだが、「我慢すること」でなく皆、「楽しん」でいる。2011年9月という限られた時期を捉えるだけでなく、それまでの3年間を使って日本の建築文化を世界に発信していくことで、2011年9月が一つの通過点として将来に繋がるだろう。

地域会担当者を含めた支部準備委員会では、JIA会員が参加するメリットを感じられるような企画を皆で検討し始めたところだ。本部で作られたUIA地域プログラムに従って実行するだけでなく、草の根からプログラムの提案を出し、地域の特性を生かした活動を展開することでUIA大会後も持続可能な活動にしていきたい。結果として活動への会員の積極的な参加や地域市民を巻き込んだ参加が見込まれてくることだろう。



トリノから東京(現地の新聞)

(株)構想建築設計研究所

地域会活動報告

世田谷地域会

シンポジウムと見学会 「半世紀を迎えた世田谷区民会館 + 区役所庁舎」に参加して



田邊 峰雄

時代の最先端のモダニズム建築として、日本を代表する建築家前川國男の設計により竣工した「世田谷区民会館と区役所庁舎」は、半世紀にわたる時代の経過の中で、種々の問題が発生したとして、世田谷区は、平成16年から3年にわたり調査研究を進め、「世田谷区庁舎整備調査研究報告書」をまとめた。それによると、改修と改築との比較検討を行なった結果「機能面、施工面の比較では、改築の方がメリットが大きい。経済面においては、改修費を含めた長期的視点で判断する必要がある」とされている。区内の各所で、この報告書に基づいた報告が行なわれ、区民からの反応は様々だったが、その中には、機能面だけではなく、庁舎の持つ景観および文化的側面についての意見もあったことから、区民の共通財産である区民会館と庁舎がこの半世紀にわたって果たしてきた役割を見学しながら、歴史と現状を再確認しようという見学会とシンポジウムが8月2日(土)に区民会館で行なわれた。

暑い盛りの日曜日であったが、多くの区民ならびに建築関係者の関心を集め、約110人の人が集まった。一般区民と建築関係者の割合はほぼ半々だったようである。

「挨拶」小林正美(世田谷地域会代表、明治大学工学部教授)

地域会として、地域資産のあり方に関心を払ってきたが、世田谷区民会館+庁舎は重要な地域資産であり、その現状を知り、意味を勉強することによって、再生させる道はないかを、施設を使っている人、設計をした人の話を聞くことによって探り出そうということが目的と挨拶された。

「庁舎問題についての現状」原田(庁舎問題担当課長)

この庁舎は区人口が17万人の時に造られて、現在83万人になり、職員も1100人から5100人に増え、機能的に目一杯であること、耐震対策としてIS値=0.6を目標とする補強はしたが、災害対策本部としてはIS値0.9を確保したいこと、老朽化が進行していること、OA化対応が出来ていないこと、バリアフリーが不十分、利用者のプライバシー保護の不十分さがあること、駐車場不足、室内環境のパラツキなどをパワーポイントを使って列挙された。

「建築家前川國男」松隈洋(京都工芸繊維大学准教授)

これらに対して、建物の価値を考えるのに現在の価値尺度で判断することの無理さを訴えながら、前川事務所のOBであり、専門とする建築史家の立場から建築家前川國男を紹介された。戦争を挟んで、我が国が近代化する20世紀を生き、多くの作品を後世に残した前川國男の基本的な設計姿勢は、「建築が人々の生活を守り、それを支えるものでなければならない」であったと、戦後の木造プレハブ住宅、団地計画の紹介、そして多くの建築に「公共性」としての広場、近隣との繋がりを意識させるピロティ、樹木を配した息抜き空間などの存在を写真で事例紹介された。

それらは、建築が唯一の建築としてあるのではなく、町並みという建築の群れとしての「たたずまい」を意識した作品であることを示していた。そして、最後に、「保存のためでなく、残しながら上手に修復して、再生する価値観をもっと育てて行くべきです」と結ばれた。

世田谷区民会館・庁舎について

「四社で行なわれたコンペ、当選後の設計条件の厳しさ」

奥村圭一(建築家・元前川國男建築設計事務所)

敷地条件、予算に対する姿勢を紹介されながら、内外共のコンクリート打放し、蒸気の直暖などの仕様決定の経緯を紹介され、コンクリートで空間を創る、仮柱でなく型柱としてのコンクリート打放しの持つ存在感への拘りを熱っぽく語られ、50年経ったから老朽化したなんてとんでもない、行なわれた補修工事に愛情を感じられない、貧相な姿になっていると断じられた。

パネルディスカッション 司会：野沢正光(建築家)

地球温暖化対策としてCO₂を削減しなければならない環境のもとで、建物を楽しむ、古いもの、文化財を維持しながら、知恵をしぼり、どうやったらもっと良く使えるか、専門家として地域に生きる我々の問題でもある、と発言されてディスカッションがスタートした。最初に鯉坂世田谷地域会会員より、使いながらの庁舎建築の再生事例、三重県庁舎、目黒区役所、国際文化会館の紹介があり、次いで、利用者の立場から、130人程の団員を抱える井川嘉子世田谷区民合唱団副委員長から、週1回の練習にも利用。1200名収容のホールは音響も良く、トップクラス。毎週のように本格的な催し物が行なわれていること、しかし、練習場、楽屋、駐車場がなく、庁舎は迷路、バリアフリーではないなど、区職員と同様の苦情。苦情の大半は、設計意図を一貫させて来なかった欠陥でもあると感じられた。三つの事例の内、特に第17回BELCA賞ベストリフォーム部門表彰を受けた国際文化会館については、関係された鯉坂会員、小林地域会代表から改修に至る経緯の丁寧な解説があり、様々な既存を生かし、耐震性能を含めた機能向上への手法のあることが紹介された。また、一般参加の前川事務所OBの方々を紹介され、それぞれの発言は、コンペで設計者の選定がされながら、その後の増築、維持管理に至る過程に、基本的な設計意図の継承がなされなかったこと、愛情のない補修の積み重ねの結果、改築を示唆する報告書の出現に至っていることへの無念さ、そして、コンクリートで空間を創ろうとし、愛情を持って仕事に情熱を傾けた共通する姿勢が示され、聴衆の感動を呼んだ。

まとめ

問題は、地球環境を護らなければならない時代に、偉大な建築家前川國男の建築を、時代の建物への要求を吸収した上で、再生する道はないかという区民会館+庁舎の再生の問題と、人口83万人の区役所が機能的にどうあるべきかという区役所のあり方の問題との二つである。

保存再生手法の可能性は見てはきたが、この場所で区役所と区民会館の双方の立地で良いかという敷地、道路、区全体へのサービス上の問題もありそうである。

同時に、設計意図の一貫性を担保する建築設計発注方式の再検討の問題、そして、「効率とコスト」のみを追求する価値観の修正の必要性、つまり、機能性、経済性を超える建築自体が人に語りかける何かを考えて行くことの大切さを聴衆に考えさせたシンポジウムでもあった。

(株)共同建築設計事務所

小さな秩序のつながり

住宅をとりまく音環境：T-House



田原 香織 氏

昨年の12月16日(日)銀座INAXセミナーホールにて第6回ハウジング・フィジックス・デザイン研究会が開催された。講師に建築家の藤本壮介氏、コメンテーターとして東京大学の佐久間哲哉氏を迎えての最終回となった。最終回では、テーマを住宅をとりまく音環境とした視点から、興味深い議論が繰り広げられた。

無関係のつながり

今回テーマとなった藤本氏設計のT-Houseは、群馬県の前橋駅の近くにある。閑静な住宅街に突然現われる黒いファサードは、家の中に入る前から室内はどのような様子なのだろうという関心を抱かせる。

T-Houseのプランは多角形のワンルームの空間を壁でいくつかの部屋にしきるといふもの。部屋と部屋の繋がりが曖昧で、ものすごく薄い壁で仕切られていることが住宅の中で様々な距離感や場面をつくりだしている。部屋を定義していないということで、住宅の中で一体感や、安心感を生み出しているのである。空間の用途のグラデーションにより、部屋と部屋があいまいに仕切られていることが住宅の中で「遠いけど近い」という距離感を作り、薄い壁一枚でのそのしきりが「近いけど遠い」というプライバシーを保つ距離感も作り出す。「無関係という関係であり、空間になりきれしていない部屋が繋がることで大きな秩序をつくり出している」と設計者の藤本氏はいう。

また、T-Houseに「中心」は存在しない。「奥まっているところ」と「つながるところ」の二つで空間が構成されていて、壁の微妙なズレによって「中心」を作らないよう計画されているのである。それにより、歩くたびに差し込む光の切れかたが異なったり、生活の一瞬一瞬で違った見え方を体験でき、また、離れた部屋でのやり取りが聞こえ、気配や存在を感じとること



会場風景

ができる。それが、この家での生活を豊かにし、より楽しくするのだろう。

広がる感覚や包まれている感覚を生み出す空間が良いという藤本氏の考え方は、住宅だけではとどまらず、その探究心は衰えることをしらない。レクチャーでは、T-Houseの他にも、子供の精神病院や安中のコンペ案についてもお話ししていただいた。安中のコンペ案についても、T-Houseからはじまったワンルームにひだのあるようなカタチの建築について、距離感や同じ家に居る人との関係についてがヒントとなっているようだ。

音による関係

今回のコメンテーター佐久間氏からは、藤本氏のT-Houseを音環境から見た視点でコメントをしていただき、住宅の音環境について理解を深めた。音とはとても感覚的なものであり、これをどう住宅に生かしていけるのだろうか。佐久間氏は、住まいの音環境について「遮音すれば良いというだけではなく、外と音で繋がることは心理的な問題に寄与する」という。視覚と聴覚による「見える見えない」「聞こえる聞こえない」による関係の多重性について、音を導くことによる関係の干渉性についてのレクチャーを受け、音環境と住宅というのは、今まで自分が想像していたもの以上に密接な関係があると感じられた。

藤本氏は音の環境については設計段階では考えていなかったが、今回の研究会でとても面白い発見ができたとおっしゃっていた。会場にいた私たちも、今まで考えていない見方を発見することができたのではないだろうか。

きこごちの良い家

今回は特別に、T-Houseのお施主さんにも会場にいらしていただくことができ、最後のディスカッションでは実際に暮らしている本人にしか分からない住みごちについて、とても貴重なお話をしていただいた。その中で藤本氏の「日々使う、行なう場所の建築は感覚的であり、繰り返しの中で生まれる価値が大切だ」という言葉がとても印象深かった。

今回の研究会では、今まで意識しなかった住宅内での人との関わりの切り口を見つけることができ、とても有意義な時間を共有できたのではないだろうか。この研究会を通して、設計者と環境工学について考える人との距離がさらに縮まることを期待したい。そこから生まれる空間に大きな可能性を見いだすことができるのではないだろうか。

東北大学大学院 都市・建築学専攻 建築空間学研究室

士法改正の対応準備は できていますか？

10月15日現在



広報委員会相談役
近藤 剛啓

2008年11月28日から建築士法改正の第二弾がスタートします。対応の準備はできていますか？

建築士法改正の流れ

第一弾の改正（2007年6月に基準法改正と同時に施行）

1. 建築士等の業務の適正化

名義貸しの禁止

確認申請等に建築士の氏名記載義務付け

建築士事務所の業務実績、所属建築士の氏名等を毎年度知事に報告（これは元請だけでなく下請として行なった設計・監理業務について）

書類の閲覧（建築士事務所および都道府県での閲覧書類）

2. 罰則の強化等

大幅強化（ただし現在見直すことになっています）

建築士氏名・建築士事務所名称の公表

3. その他

図書の保存（設計図書の保存年数が5年から15年に延長）

第二弾の改正（今回施行）

1. 建築士の資質・能力の向上

2. 設計・工事監理業務の適正化と消費者への情報開示

を目指したものです。

第三弾の改正（2009年5～6月末予定）

1. 高度な専門能力を有する構造設計および設備設計の適正化

2. 団体による自律的な監督体制の確立

を目指したものです。

第二弾、第三弾の改正のポイント

1. 建築士の資質・能力の向上（2008年11月28日施行）

定期講習の義務付け

建築士事務所に所属する建築士に対する定期講習の受講（3年ごと）が義務付けられます。受講歴は建築士名簿に記載されます。

建築士試験の受験資格要件の見直し

学歴要件の見直し、実務要件の適正化、試験内容についても見直しが行なわれます。

2. 設計・工事監理業務の適正化と消費者への情報開示

（2008年11月28日施行）

建築士事務所を管理する管理建築士の要件を強化

建築士としての実務経験は3年以上となります。管理建築士講習を受講・修了する必要があります。修了考査が実施されます。

（講習は1日程度）

管理建築士などによる重要事項説明の義務付け

設計・工事監理契約締結前に管理建築士等による重要事項説明および書面による確認が義務付けられます（設計図書の種類、監理時の設計と工事との照合方法と報告方法、担当設計者の氏名と資格、報酬額と支払い時期、契約解除、免許証の提示、賠償保険の提示）。重要事項で説明する内容は、10月末に国土交通省より公表の予定です。

再委託の制限

建築士事務所以外への再委託が禁止されます（ただし部分委託を禁止するものではない）

分譲マンションなど発注者とエンドユーザーが異なる一定の建築物の設計等（3階建て以上かつ1000m²以上）について、一括再委託（いわゆる丸投げ）は全面的に禁止されます。

建築士名簿の閲覧（大臣、知事の指定した指定登録機関により建築士名簿を一般の閲覧に供します。）

顔写真入り（ICチップ入り）の携帯用免許証の交付

従来の免状型のものも任意で切り替えることができます。

（手数料が必要）

3. 高度な専門能力を持つ建築士による構造設計および設備設計の適正化

構造設計一級建築士・設備設計一級建築士の創設

一定の建築物に対する法定適合チェックの義務付け

（2009年5月27日運用開始）

4. 団体による自律的な監督体制の確立（2009年6月末予定）

建築士事務所協会および建築士事務所協会連合会を法制化

建築士事務所に対する指導、建築主からの苦情を解決します。

建築士会、建築士事務所協会等による建築士等に対する研修の実施

その他の関連した動き

1. 告示1206号業務報酬基準の見直し

実態に見合った報酬基準となります。

用途区分が細分化されます。

業務算定のベースが工事費から床面積となります。

総括・意匠、構造、設備の業務量が明示されます。

標準業務、標準外業務の区分が変更されます。また項目が明示されます。

2. 工事監理ガイドライン

具体的な照合方法が定められます。

3. 四会連合契約約款・業務委託書の見直し

建築基準法、建築士法の改正との整合が図られます。

告示1206号業務報酬基準の見直しとの整合が図られます。

注目すべき情報源

士法関連、告示、約款とも同時に整備が進められています。関連の規則、パブリックコメント、Q&Aなどが随時公表されますので、常に注目が必要です。

[参考]

・財団法人建築行政情報センターのHP
<http://www.icba.or.jp/kenchikushiho/>

・国土交通省のHP

http://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku_house_tk_000004.html

(株)日本設計企画本部



先人に学ぶ素直で自然体な物創り

生態系の中の創造物としての建築

「くらしの学校」の目指したもの



木下 光

山深き南信州とは

私たちが生活する南信州は尾根の高い南アルプスと中央アルプスに囲まれ、面積の80%が森林地帯である典型的な中山間地域です。河岸段丘の底部を天龍川が流れ、山並みに囲まれた河川は彫りの深い谷間を形成し、谷間ごとに孤立せざるを得ない地形条件の中、長い年月に渡り**独自の産業・生活文化を培って**きました。故郷に帰りアトリ工務所を開設以来、このような飯田市近郊の独自の文化を持つ小自治体に地域産材・工法による幾類かの交流・体験施設を提案してきました。今回「公共建築賞」にこの中の都会の子供たちの通年合宿施設「くらしの学校・だいだらぼっち」が選ばれましたので、都会と地方のスタンスについて少し触れてみたいと思います。

南信州の南端 2200人の山村・泰阜村は、山村の生活文化を色濃く残し、まさに秘境という言葉がふさわしい自然の宝庫です。環境意識の高い親を持つ都会の子供たちが地元の小・中学校に通い、「くらしの学校」で共同生活を送りながら人間の原点ともいえる様々な体験、たくましさや身につけ、知恵と感性をじっくり磨いていきます。自然のサイクルとかけ離れた都会の大量消費型生活から軸足を移し、驚くほどあたりまで尊いもの、忘れかけていた「何か」を「**心のお土産**」として帰っていくのです。

関東ブロックの審査委員長は現地にも来られ「くらしの学校」に対し「**信州のオーガニック・ガウディー調**」と評され、関東圏内で一番高評価であったと評され大変驚き感激した次第です。南信州の地域素材で組み上げ、**自然エネルギー活用により居住性を追及した極めてローテクな施設**がそれなりの評価を受けたのでしょうか。（『建築ジャーナル』2008/1、特集号参照）



「くらしの学校」完成時

止まらない温暖化

日々地球温暖化という言葉を目にする日はないわけですが、この建築界だけは一番無縁で遠距離的、メディアに載ることが到達点……すべてとは言いませんがそんな建築物があふれているように感じられます。膨大なランニングコストが掛かるであろう都心部の巨大な全面ガラス張建築・商業建築の昼間からの過照度照明等……地方でCO₂の還元にと山林の保全に取り組み、照明器具一つ慎重に選択しても都心部の建築の前には余りにも無力です。今後、中国・インド・ドバイしかり同じような建築が続々と生みだされ益々温暖化に拍車がかかることでしょう。

生態系の中の創造物へ

南信州にて創作活動を行ない古民家を再生し先人から学ぶことは、風土に対し**自然体に構え素直に受け入れる姿**です。四季の移ろい・光・熱・風の摂取と遮断……あまりにも当たり前の手法の中に現時代なりの創意工夫はあるわけでそんな手法を模索しています。自然エネルギーをいかに有効活用するかが現代の主題であり、それにより平断面・ファサードの形は決定されるべきです。（高層建築こそ光・風のダクト・オープン階など、工夫されるべき）水と緑に恵まれ独自の「木の文化」を継承してきた日本……もう一度「**生態系の中の創造物**」という視点で建築を考えられないかと思っています。天然木は不燃加工でき、今や一番のエコ素材なのです。Uターンして20余年、都会コンプレックスから脱却し、地域の持つ次世代への大きな意義を強く感じるようになりました。美しい南信州を継承し、エコロジカルな生活様式・地域創りのため、行動して行きたいと思っています。

きのした・ひかる / 環境プランニング



五右衛門風呂・便所棟



コテージ棟

NEWS

建築設計業務報酬基準改訂案に関する意見を募集

(11月19日締切)

国土交通省では、建築士法施行規則および建築基準法施行規則の一部を改正する省令案に関するパブリックコメントの募集を行なっています。詳細は支部HPからリンクしていますので、ご意見など提出をお願いします。

JIA建築家大会2008東北が開催されました

「風土・建築・まち」開かれた建築をめざしてをテーマにしたJIA建築家大会2008東北が盛況のうちに幕を閉じました。

アーキテツ・ガーデンが開催されました

「緑とまちと建築と」をテーマに、JIA関東甲信越支部の主催のもと2008建築祭アーキテツ・ガーデンが開催されました。次号2月号にて報告をいたします。参加された皆様、お疲れさまでございました。

委員会・地域会・部会からのお知らせ

JIAトーク 映画作家：大林宣彦氏講演

2008年度第4回目の企画を、映画作家の大林宣彦氏をお招きして開催いたします。どなたでも参加自由ですので、お誘い合わせのうえ奮ってご参加ください。

日時：2008年12月10日(水) 18:30~20:30

会場：建築家会館1階ホール (JIA トーク実行委員会)

湯島聖堂の見学会

講師：藤谷陽悦氏と共に湯島聖堂を訪ねます。

日時：11月29日(土) 13:00~(16:00) 定員：30名程度

参加費：2,000円(学生1,000円) (建築交流部会)

無暖房住宅視察会

フロンガスや電力を利用しない無暖房住宅の視察会を企画。日時：12月12日(金)・13日(土)、会場：介護サービス施設「桜ハウス玉川」茅野市民館、諏訪大社上社本宮ほか、参加費：日帰り方7870円、宿泊の方17000円(参加人数によって多少変動あり)、定員：40名

(賛助会員Aグループ)

電炉工場見学会

電炉工場見学会の企画。日時：2008年11月16日(日)、会場：関東スチール株式会社 (賛助会員Aグループ)

アーバントリップ実行委員会、建築相談委員会、UIA大会支部準備委員会、広報委員会、城東地域会、住宅部会のHPが更新されていません。

行政関連 詳細は国土交通省HPなどをご覧ください

士法改正に伴う「重要事項説明書」のダウンロード

(日本建築士事務所協会連合会)

改正建築士法では建築士事務所の開設者に対して、設計または工事監理契約の締結前に、管理建築士または当該建築士事務所に所属する建築士に、あらかじめ建築主に対し契約内容の重要事項について書面を交付して説明させることが義務づけられました。四会推奨標準様式「重要事項説明書」のダウンロードサイトが本部HPよりリンクしています。(本部HP 10月31日付)

地域木造住宅市場活性化推進事業の公募

国交省では地域木造住宅市場の活性化に資する木造住宅の供給体制整備、普及推進、担い手育成、企画開発その他の事業を公募し、優れた事業を応募した者に対して補助する「地域木造住宅市場活性化推進事業」を本年度から実施しています。(支部HP 10月20日付)

「歴史まちづくり法」が施行

歴史的な建物やまちなみと祭礼行事などの活動といった地域の歴史的な風情、情緒を活かしたまちづくりを国が支援する「歴史まちづくり法(正式名：地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律)」が11月4日に施行されます。(国交省10月31日付)

他、主なお知らせ(国交省)

- ・平成20年秋の叙勲受章者、褒章受章者 (国交省11月2、3日付)
- ・国土交通月例経済(平成20年10月号)を発表 (国交省10月31日付)

こんな本を読みました

『フラクタル造形』

- ・三井秀樹著
- ・B6版195ページ
- ・定価：1800円+税
- ・1996年9月発行
- ・鹿島出版会(SD選書)



本棚を片付けていたら、こんな本を見つけました。一時期、建築界で「フラクタル理論……ゆらぎ……」という言葉をよく耳にしました。そんな時に手にした本です。懐かしくなつて、改めて読んでみました。フラクタル理論とは、一言でいうと非定形で数理性的のないと思われていたもの(形・パター

ン・現象)には、実は秩序があり数式で表現できるという理論なのですが、このような現象は、自然界に数多く存在しています。オウム貝の断面を見ると、隔室によって仕切られた小部屋が対数螺旋的に大きくなっています。松ぼっくりやヒマワリの種、菊の花、サボテンの刺の配列は、まさに対数螺旋状に並びます。また、葉序(植物の茎や軸まわりの葉の配列)の比は、2分の1、3分の1、5分の1などが、多くみられ、これはフィボナッチ数列です。この本は、後半、フラクタルと建築との関係について書かれているのですが、前半の自然界でのフラクタル現象にわくわく魅せられてしまい、今回も後半までたどり着けませんでした。でも、本当に自然界は、ロマンです。 杉本由美子/(株)杉本由美子建築設計事務所

Bulletin 編集委員になって半年が過ぎました。少し慣れてきたかなと思っていますが、慣れは油断を生むもの。気をつけて携わっていかうと考えています。(M.A.)

いよいよ、年末を意識する時期になりました。いろいろな出来事があり、良いニュースよりも良くない方が多かったようですが、乗り越える素養が日本人には備わっていると思います。私もそうであるよう、日々研鑽です。(M.I.)

このごろ疲れやすく、肩のこりが取れにくい。夜更かししても朝が早いのもみんな年のせい。パソコン使うと疲れが取れるというのが出ないかな？(Hf.Ko.)

JIA 建築家大会 2008 東北に参加するため仙台を訪問した折、28年前に設計した病院を訪れた。病院は大幅に増築と改修が行なわれ、私の設計した中央診療棟は耐震補強が施されて管理棟に生まれ変わり、当時の厳しい予算で貼ったレンガ調タイルの力強いフレームが正面の顔として残った。(Hy.Ko.)

最近ジョギングに目覚め近くの緑道を走っている。ジョギングウェアで走る人、ハイキングする年配のグループ、軽装でウォーキングする人、杖をついたり車椅子で散歩する人、自転車で走る人、大人も子供も思い思い。梨や野菜を売る人もいてずいぶんにぎやかな秋である。(Y.Ko.)

お節は一式手作りですか？うちは昔から黒豆や昆布巻きなど、いくつかの定番とお雑煮、お汁粉が手作りです。それに、蟹が伊勢エビがプチ贅沢を添えます。この数年は、デパートのお節セットを頼んでいます。食べる量も減ったし中華もあって、ちょっと楽しいですよ。(Ka.Ku.)

9月より広報委員会・編集委員に加えていただきました。まだまだ慣れないことも多く、お役に立てておりませんが、読者の方に楽しんでいただけるような誌面作成のお手伝い

ができればと思っております。よろしくお祈いします。(N.M.)

この秋はアーキテツガーデン実行委員会に出向で、JIA にどっぷり漬かってしまいました。今号が出る頃には終了していますが、きっと心に残るイベントになると確信しています。(K.N.)

日経平均が遂にバブル後最安値を下回った。土法の改正もあり、今後の建築家を取り巻く環境はどのように変化するのでしょうか？(N.T.)

ふと気がつけば、秋も深く紅葉前線南下中。紅葉狩りに行けない代わりに、アーキテツガーデンでワインを飲み赤くなった皆様の顔でも愛でようかなどと思ってみたり。とは別に、先日、TVでの商品紹介出演の撮影があり、一日、カメラと一緒に。疲れたけれど楽しかったです。(R.S.)

昨年の今頃は、建築基準法改正後の影響の真っ只中で大騒ぎでしたが、なんとか私の事務所も仕事仲間も乗り越えることができました。後は、今年11月末の建築士法改正さえ乗り越えれば、とりあえず「ホッ！」なのですが、いったいどうなることか、ドキドキしています。(Y.S.)

文藝春秋から出版された『磯崎新の「都庁」 戦後日本最大のコンペ』(平松剛著)を読みました。1985年の都庁コンペ、学生時代、感動したのを覚えています。そこには、こんな「ふか〜い」裏話があったとは.....都庁コンペが今あったら、と考えるだけでも楽しい。(N.T.)

最近犬を飼いはじめました。動物愛護センターからボランティアさん経由で受取った犬です。ペットブームの裏側で、年間40万頭の犬、猫が見捨てられ殺処分されている昨今。今の日本は経済だけでなく、どうも心の問題がより深刻になってきているようです。(T.Y.)

編集 : 社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 中村 高淑

副委員長 : 近藤 剛啓・鈴木 利美

委員 : 安東 政朗・池元 真克・倉島 和弥・近藤 弘文・古池 廣行
三上 紀子・中澤 克秀・杉本 由美子・田中 宣彰・湯浅 剛

編集長 : 鈴木 利美

副編集長 : 湯浅 剛

編集委員 : 安東 政朗・池元 真克・倉島 和弥・田中 宣彰・中村 高淑
三上 紀子・菊地 良一

表紙デザイン : 山本 信治 / **本文デザイン** : 神田 雅子

制作 : 山口 尊敏

発行人 : 菊地 良一

発行所 : 社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA 館

TEL 03-3408-8291(代) FAX 03-3408-8294

印刷 : サンデー印刷社

JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・(社)日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp>

・建築家online (一般向け) <http://www.jia-kanto.org>

・JIA 関東甲信越支部 (会員向け)

<http://www.jia-kanto.org/members>

©社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2008



PROFIT GATE
2024年11月号
プロフィットゲート
プロフィットゲート
プロフィットゲート
プロフィットゲート
プロフィットゲート

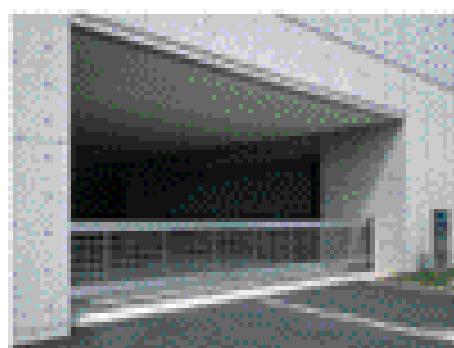
設計者がつくるゲート

門扉も建物とデザインでサポートするプロフィットゲート

プロフィットゲートのデザインは、建築設計事務所から行われます。



プロフィットゲートのデザインは、建築設計事務所から行われます。



プロフィットゲートのデザインは、建築設計事務所から行われます。



プロフィットゲートのデザインは、建築設計事務所から行われます。



プロフィットゲートのデザインは、建築設計事務所から行われます。



プロフィットゲートのデザインは、建築設計事務所から行われます。



プロフィットゲートのデザインは、建築設計事務所から行われます。



株式会社ヒガノ

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL: 03-5561-1111 FAX: 03-5561-1112
E-MAIL: info@higano.co.jp

プロフィットゲートは、プロフィットゲート株式会社から提供されています。プロフィットゲートは、プロフィットゲート株式会社から提供されています。

プロフィットゲートの詳細は、<http://www.higano.co.jp>